

「今、私の晴雨計は！<sup>⑳</sup>」

「デパートは

都市文化の担い手！」 1

平 山 征 夫

今から六〇年前の昭和三十一年秋、小学校六年生の修学旅行で私は初めて柏崎から新潟市を訪れた。県都の賑わいに驚くばかり。県庁など見て万代橋近くの「こば平」「角屋旅館」にクラス毎に分散宿泊、翌日は港めぐり、日報の新聞印刷工場など見学して、最後「小林百貨店」で買い物だった。当時珍しかったコロツケを五人分食べて夜中腹痛を起こした。君の看病で旅館に残った私も合流して、百貨店初体験をした。そ

の広いことと溢れる品物に圧倒され、二〇〇円（三〇〇円？）の小遣いで何を買ったか覚えていない。只々生まれて初めて夢のような時間を小林百貨店で過ごしたことは今も忘れない。

これは、たまたま訪れた「新潟三越」で募集していた「小林百貨店創立一〇〇年記念 小林百貨店と私」という思い出募集に私が投書したものである。小林百貨店は一九〇七年（明治四〇年）創業の小林呉服店を嚆矢とし、現在の新潟三越の前身で、一九三七年（昭和十二年）に新潟市初の百貨店として創業。同年地元商店が集まって創業した万代百貨店（後の大和）と古町・西堀の交差点を挟んではず向かい同志に七階建て

の近代ビルを競う姿は正に「近代都市新潟」の象徴だった。地元紙・新潟日報は創業日の両百貨店の賑わいぶりを「新しいもの好きの市民殺到」と書いている。

「へエー！新潟市民は新しいもの好きだったのか」。両百貨店は開業後十八年目の昭和三十年十月の新潟大火で焼失。年表上は昭和三十二年復興とある。でも私の小学六年の秋は昭和三十一年である。十月の大火から一年で再建したのだろうか。疑問が残っている。そして私のアルバムには、旧県庁玄関の階段と萬代橋西詰で撮ったこの修学旅行の記念写真が二枚載っている。担任の中村忠先生を囲んで、兄弟のような家族のような雰囲気、柏崎市立枇杷

島小学校六年二組の皆が写っている。私もまだ何にも染まっていない本当に無垢な表情で写っている。我がアルバムの中でも大事な宝物だ。

その後の両デパートの辿った運命はご存じの通りだ。多くの映画館など娯楽施設も集まり、古町の飲食街と一体となって一大盛り場を構成していたこの地域も、モーターリゼーションの進展、都市のスプロール化などにより、人の流れが変わり、近年ではネット販売の影響もあり、集客力をどんどん低下させてしまった。二〇一〇年、ついに「大和」は多くの食品売り場ファンに惜しまれながら閉鎖された。漸く最近になって跡利用の工事が始まったが、この

数年の空白は取り返しのつかない客足の喪失を招いたようで、困った市では、その昔この地から出て行ったはずの市役所の一部を戻すという。あとは銀行が三Fまでのフロアーを占めるそうで、商業施設としての復活は期待出来そうにない。更に周りの「ラ・フォーレ原宿・新潟」も一九九四年

そんな三越に「頑張れ！」とエールを送りたい思いがあったからだろう。小学校六年生の時の思い出の場所が残っていてほしいという想いとともになんか。

(平成二十九年四月十二日)

のあの華やかなオープンから二十二年の昨年閉店、こちらこそ旧市役所の再開発だったが、ここにも市役所の一部が引越してくるといふ。何とも知恵も面白くない対応だ。ウイズビルも取り壊され駐車場に転換と、この地域は衰退の一途を辿っている。残った「新潟三越」は孤軍奮闘と言うところだ。冒頭の感想文投書には、